

社会病理学

園直樹

Social pathology

NAOKI SONO

序

病理学はその前後に生理学と臨床医学を持っている。同様に社会病理学はその前後に理論社会学及び社会臨床学とでも名づけるべき、社会保障やケース・ワークを持っているであろう。この短い論文は社会病理学とその前後に就ての方法論的な考察である。

第一章は四つの星にも比すべき四人の社会学者、マートン、パーソンズ、デュルケム、トーマス (Merton, R, Parsons, T, Durkheim, E, Thomas, W.I) の理論の考察である。即ち順応とアノミー・社会統制と逸脱行動・均衡と不均衡・社会組織化と社会解体の考察である。第二章は社会病理現象と家族及び職業との関係である。第三と第四の章は社会病理現象の原因を国家又は自己に置く。この観点から前者の場合に社会保障が、後者の場合に「悩む者が自分自身を知る為の」ケース・ワークが開始されるであろう。

第一章

1

パーソンズの「社会的行為の構造」1937 (P. 442) によればデュルケムは次の如く云っている。「社会は諸個人の心の中のみ存在する」 (Society exists only in the minds of individuals)。そこで個人は彼の心の中の社会を実現する為に行動するのである。さて彼の周囲には諸個人のが居る。彼の行動が諸個人の心の中の社会に一致する場合と不一致の場合とがある。前者が順応・社会統制・均衡・社会組織化と云われ、後者がアノミー・逸脱行動・不均衡・社会解体と云われるのである。以下その要点をマートン、パーソンズ、デュルケム、トーマスの順で述べよう。

マートンは「社会理論と社会構造」(改訂, 1958) で次の図式を示す。(P. 140)。但し I~IV がアノミー (Anomie) であり, I, II は強制的順応 (Compulsive Conformative) の, III, IV は強制的離反 (Compulsive Alienative) の型である。+は受容, -は拒否, ±は支配的価値を拒否しそれに代る新価値を創造する。

適応様式	文化目標	制度的手段
0 Conformity (順応)	+	+
I Innovation (改変)	+	-
II Ritualism (儀礼主義)	-	+
III Retreatism (退却主義)	-	-
IV Rebellion (反逆)	±	±

パーソンズの「社会体系」(1952)によれば「マートンの図式は行動を制度的目標・手段即ち対象への構えからのみ捉え、動機づけの要素つまり態度の面が欠けている。行動は両者の面から捉えるパターン変数で考察されねばならぬ」(P. 258)。パターン変数は彼の「行為理論作業論集」(1953)で次の如く示されている (P. 182)。但し 0 は対象への構え (object-orient), a は態度 (attitude) の略である。

局面 パターン変数

- A Universalism (o)—Specificity (a)
- G Performance (o)—Affectivity (a)
- I Particularism (o)—Diffuseness (a)
- L Quality (o)—Neutrality (a)

Universalism は普遍主義, Particularism 個別関係主義, Performance は業績本位 (Achievement), Quality は所属本位 (Ascription) の意味である。(P. 67)。

マートンの順応に同一視されるのが社会統制である。社会統制の場合に四局面 (パターン変数) は社会統制過程 (Social Control Process) として以下の如く連続 (L—I—G—A) せねばならない (P. 74)。

- L Permissiveness (許容)
- I Support (支持)
- G Denial of Reciprocity (相互作用の否認)
- A Manipulation of Rewards (報酬の操作)

パーソンズは「家族」(1955, P. 39) でこれを児童の社会化過程で説明しており, L (児童の欲求), I (母のそれに対する支持), G (父のそれに対する規範の教示), A (児童の欲求充足) となっているが経済の問題では次のように云えるであろう。即ち A (賃金獲得) には L (労働力) と I (職場) と G (雇用契約) が必要な

のである。さて他方、逸脱行動 (Deviant Behavior) の場合、四局面 (パターン変数) は社会統制過程で連続せず夫々独立のパターン即ち逸脱型となる (「行為理論…」 P. 74)。以下の逸脱型 (I~IV) はマートンのアノミーと夫々番号順に同一視される。同様に I と II は強制的順応型, III, IV は強制的離反型である。社会統制と共に逸脱型とパターン変数 (局面) の関係を「行為理論…」 (P. 74) と「社会体系」 (P. 257, 271, P. 280~89, 324) で示せば次の如くである。但し II の型は Compulsive Acquiescence 及び IV は Aggressiveness と同じ意味である。

タイプ	「行為理論…」	「社会体系」
0 Social Control (社会統制)	社会統制過程 (L-I-G-A)	
I Compulsive Performance (強制的遂行)	G	A
II Compulsive Acceptance (強制的受容)	A	L
III Withdrawal (退行)	L	I
IV Rebelliousness (反逆)	I	G

私は「社会体系」の方の図式に従う。その方がマートン, パーソンズ, デュルケム, トーマスの図式を夫々番号順に同一視するのに有効である。そして上の両書に於る喰い違いが単に表面的であり原理的な喰い違いでない理由として次が考えられる。

パターン変数は「行為理論…」によれば基本的には以下である (P. 179)。

- (1) Universalism = Neutrality
- (2) Performance = Specificity
- (3) Particularism = Affectivity
- (4) Quality = Diffuseness

局面はこれが次の如く組合されている。A = ① + ②, G = ② + ③, I = ③ + ④, L = ④ + ①そして「社会体系」では A = ① + ②, G = ③ + ②, I = ③ + ④, L = ① + ④である。但し例えば A は「行為理論…」では Universalism = Specificity, 「社会体系」では Naiversalistic = Achievement となっているが同じ意味である。

逸脱型とパターン変数の関係は基本的には次の如く考えられる。

- | | |
|---------|-------------------------------|
| ① 強制的受容 | ① Universalism = Neutrality |
| ② 強制的遂行 | ② Performance = Specificity |
| ③ 反逆 | ③ Particularism = Affectivity |
| ④ 退行 | ④ Quality = Diffuseness |

そこで「行為理論…」の方は A を (1) にアクセントを置いた逸脱型より、他方「社会体系」の方は A を (2) の逸脱型より扱っている。以下同様である。次にデュルケムの

図式である。

デュルケムは「自殺論1897」 (Translated by Simpson, Suicide 1952 Part II) で次の図式を示す。但し I~IV が不均衡 (Disequilibrium) である。均衡はマートンらの順応・社会統制に、不均衡はアノミー・逸脱行動に夫々同一視されるであろう。

0 Equilibrium	(均衡)
I Anomy	(無統制)
II Altruism	(愛他主義)
III Egoism (continued)	(続, 利己主義)
IV Egoism	(利己主義)

主として I は産業労働者, II は軍人, III は独身者, IV は新教徒などに見られる逸脱である。彼が III と IV の利己主義を別々の章で述べている事は注意すべきである。

第四に「ポーランド農民」 (1927) の著者トーマスは彼の弟子 Volkart の編んだ「社会行動とパーソナリティ」 (1951, Part III) で次の図式を示す。但し I~IV が社会解体 (Social Disorganization) である。社会組織化はマートンらの順応・社会統制・均衡に、社会解体はアノミー・逸脱行動・不均衡に夫々同一視されるであろう。

0 Social Organization (社会組織化)
I The Desire or Security or Mastery (安泰又は支配の願望)
II The Desire for Response (応答の願望)
III The Desire for New Experience (新経験の願望)
IV The Desire for Recognition (認識の願望)

但し私はデュルケムが均衡を「健康の特徴である中庸 (Moderation) の満足」 (デュルケム, 前掲書 P. 250) と考へ、ヒポクニテスが健康を彼の云う四要素の適正な配合 (均衡) と考へ病気をその不均衡と見なした如くにトーマスの図式を把える。即ち社会組織化とは上の四願望が平均的に配合されており、社会解体とは或る願望が著しく現わる状態である。恰もカラーテレビに於て三原色を重ねれば無色となり一原色の現われは他の原色の後退の如くである。

2

以上我々は行動に就て四人の見解を概略した。既に 0 の順応・社会統制・均衡・社会組織化のアナロジーの説明は不要であろう。以下アノミーなどに関する I~IV の範疇に就て若干説明する事にしよう。つまりマートン, パーソンズ, デュルケム, トーマスに於る彼らの感受性, 綜合, 分析, 雄大への興味と尊敬が我々にその共通の理論的整序を行わしめる。

〔Ⅰ〕 マートンの「改変」（文化目標⁺，制度的手段⁻）は出世主義者の「目的に対し手段を選ばず」である。勿論彼は規範が外部的条件として意味を持つ事を知っているが，規範は彼にとって単に技術の方便に過ぎぬ。故に悪評を招かぬ限りそれは私益の為に蹂躪される。彼は彼に対する情緒的な支持よりも彼が得た既生事実・業績への支持を欲する。これは概して下層階級に見られる型である。社会はこの階級に対して門戸を閉しているから彼は常に成功への幻影と「もう少しだけ」の欲望が無限に続くのである。次にパーソンズの「強制的遂行」である。規範が彼にとって条件として必要な場合に彼はそれを重んずる。そして彼はそれの利用によって報酬を得ようとする過度の野心家・強制的な業績主義者である。彼は情緒に対し中性である（Affectivity=Neutrality）。この様な型は産業社会のメンバーに多く見られる。彼は局面Aの **Universalism=Specificity** つまり普遍主義的業績本位（**Universalistic=Achievement**）なのである。第三でデュルケムの「無統制」である。産業界に現われるこの型は失業 やや厳しい批判・人気失墜など慣れた地位の突然の低下により怒り・焦燥・特定人に対する攻撃などの徴候を示す。最後にトーマスの「安泰ないし支配の願望」である。彼は世間から除け者になる事を怖れる故に規範の中で安泰に暮らそうとする。彼は例えば財産作りに興味を持つ俗人タイプである。さて安泰の願望はその系譜に支配の願望を持っている。彼は権力・所有への興味そして家庭での暴君及び政治的地位などに重なる。彼は人々に対する憎しみと底知れぬ野心を持っている。以上四人の見解に多少づれがあるにしてもそれらを〔Ⅰ〕の範疇に入れる事が可能であろう。私はこの範疇を仮りに抜目のない現実主義と呼んでおく。

〔Ⅱ〕 マートンの「儀礼主義」（文化目標⁻，制度的手段⁺）は制度的手段の重視によって特徴づけられる。（以下マートンの前掲書第四章の儀礼主義と共に第五章に於るその続編を参照した）。リチュアリストはパーソンズが「地位期待に於る強制的受容」の型と呼んだL局面の **Quality=Neutrality** つまり普遍主義的所属本位（**Universaristic=Ascription**）の運命主義者である。彼は組織に誘惑される。官僚がこのタイプである。彼は〔Ⅰ〕の範疇の如き社会的ダーウイニズム乃至競争的斗争に無関心であるから焦燥がない。未来の成功に興味がなく「今ここに於て」(here and now) 与えられた仕事を協同的にやって行く。しかし彼は内容よりも形式を重んずるのである。何故なら彼は自己も周囲も内容も空虚であり他方形式は壮大である事を知っている。さてこの型は一オクターブ高い調子でデュルケムの「愛他主義」

に於る軍人などにも見受けられるであろう。彼は組織に対する連帯感・服従心・犠牲精神・名誉・勇気・感激を以って充されている。これはパーソンズの云うギャング組織のメンバーの心にも通じるであろう。そして此等はトーマスの「応答の願望」即ち諸個人との結合愛に相通じるであろう。以上の範疇は権威主義と呼んで差支えないと考えられる。

〔Ⅲ〕 マートンの「退却主義」（文化目標⁻，制度的手段⁻）は敗北主義とも云われる。この代表的人物は「モダン・タイムズ」等に於るチャップリンや漫画ミッキー・マウスである。彼は「誰でもない氏」(Mr. Nobody) でありその斗いと目標は決してポパイの如くにはない。其処には世間に対する冷笑があるけれど，より本質的にはファンタジーと情緒で満されている。彼は一人ぼっちだが，こそ泥的な薄汚い人々には親身である。この退却主義はパーソンズの言葉を借りると1局面の **Particularism=Diffuseness** つまり個別関係主義的所属本位（**Particularistic=Ascription**）のソシオメトリック・スターの「退行」であろう。この退行はしかし成功と規範を拒否する形での自尊心・自発性を持っているのである。さてこの型はデュルケムの「統，利己主義」に於る独身者に相通じる。この型は主に退屈を伴う平和・金銭万能の社会・政治のゆるんだ社会に現われ戦争中などの危機の時代には表に現われない。ところで彼は事業や公務或は家族に対する義務には甚だ不熱心であり自分が社会的な社会に於て無意味である事をよく知っている。そして彼は社会から離れた態度で自己と社会を分析する事に才能をもっている。それは懐疑者の大悟した冷静さで表現されていると云われる。しかし他方彼は子供や動物のような生活に郷愁を持っている。この事を強調すればトーマスの云う「新経験の願望」即ち逃走・カンニング・ゴマカシ・デタラメ等それ自体のスリルを愛する事や不安定な事・冒険・未知な事・放浪・文化果てるところを憧れるようになる。以上のカテゴリーは一切の拘束の欠除を好むと云う意味で自由主義と各づけられるであろう。

〔Ⅳ〕 我々が見た〔Ⅰ〕現実主義と〔Ⅲ〕権威主義は「強制的順応」ないし「普遍主義」の観点に於て連続しているであろう。次に〔Ⅱ〕自由主義とこれから考察しようとする〔Ⅳ〕理想主義とは「強制的離反」又は「個別関係主義」の立場より連続するであろう。さてマートンの「反逆」（文化目標⁺，制度的手段⁺）は〔Ⅲ〕の如く与えられた価値を拒否するだけでなく，新しい価値を創り出す事によって社会を変革しようとする。革命などの組織的運動俱がっているのは明らかにこの点であ

る。反逆者は〔Ⅰ〕の如き自己の利益・業績・任務に対して強制的に避けようとする。パーソンズによれば彼は予言者や「いしづえ的人間」がそうである如くに、いわゆる社会的人間に対しては感情的に嫌悪を抱きつつ「業を荷って荒野を行く山羊」(Scapgoat)としての自己に課せられた使命を世間に対して完徹しようとする。「反逆」がG局面の Performance=Affectivity つまり個別関係主義的業績本位(Particularistic=Achievement)と云われる所以であろう。この型は internal な方向に於てデュルケムの「利己主義」に於るプロテスタンチズム乃至ストイシズムに通じるであろう。それは権威主義的なカトリシズムと対立し自由主義なエピキュリアニズムとは裏腹の関係にあるといわれる。この型は我々に「人間の幸福をでなく、人間的偉大さと我々の性質の高貴さの形成」を戦闘的に唱えたM・ウェーバーの精神を想起さすに違いない。其処には自分自身に対する義務と道徳が見出されるのである。漸てこの型はトーマスの「認識の願望」へと我々を導くであろう。トーマスは創造の為の認識と当為の例として医学者パストールの研究態度を挙げている。この範疇を文字通り理想主義と名づけようと思う。理想主義は何故徹底して純粋にまで行きつかねばならないのであろうか。

以上我々は〔Ⅰ〕現実主義,〔Ⅱ〕権威主義,〔Ⅲ〕自由主義,〔Ⅳ〕理想主義の各カテゴリーに就て考察した。時に四人の社会学者達が互にその著に於て引用しているにしても、元来夫々単独に考えられた図式であるから上挙のように関連づける事は若干の疑点を残すと云える。しかし社会病理学即ち行動の限界を明確にする仕事を学ぶ我々にとってこの様な試みは決して無駄とは云えない事を確信するのである。さて次に社会病理現象が社会変動に対して持つ意味に就て節を改めて考察しよう。

3

個人は彼の心の中の社会を実現する為に行動する。彼の行動がその周囲の諸個人の心の中の社会に一致する場合は順応・社会統制・均衡・社会組織化であり、不一致の場合がアミノー・逸脱行動・不均衡・社会解体と云われる。前者の場合彼の心に抽象的には既述の(1)現実主義(2)権威主義(3)自由主義(4)理想主義が平均的に配分されていると考えられる。そしてその周囲の諸個人の心の状態が同様なのである。或は具体的には彼の周囲の諸個人の心が例えば現実主義でありそれに対して彼の心とその表現が一致していると云ってもいいであろう。いつれにしても上挙の一致の場合がパーソンズの言葉では社会統制過程と云われるのである。

さて不一致は一致の次に来る。そして不一致の場合に

彼は心の中に彼の周囲の人々とは異った社会を持っている。彼はこの心の社会を実現する為に行動する故に逸脱行動と云われる。それ故にパーソンズの「経済と社会」(1956)は次のように云うのである。「最初に社会統制なる一致・均衡があり次にそれからの逸脱である不一致・不均衡は元の均衡に戻らないで更にその逸脱の方向を強める傾向をもつ。この逸脱は或る別と比較的安定した均衡に到達する迄持続する」(P. P. 247~48)。この言葉を次の如くに考察しようと思う。即ち最初の抽象的な又は具体的な社会統制過程から逸脱する行動に既述の(1)(2)(3)(4)の型がある。そして一つの逸脱型はそれにふさわしい新しい、社会統制過程を求める。つまり逸脱を契機に最初とは異なる社会統制過程が生れる。

この心の社会の変動の理論的説明にパーソンズの「行為理論…」を参照しよう。既述のように(1)現実主義(2)権威主義(3)自由主義(4)理想主義の逸脱型は彼の言葉では夫々局面A, L, I, Gであった。そして各逸脱型が夫々新しく欲する社会統制過程にも当然A, L, I, Gの各型がある。さてこの様な「多様な行動が存在するには最初に、行動の能力(Quality)ないし源泉(Resources)を必要とする。それは多様を重ね合せた一様(カラーテレビの方式の如く)或は多様を還元する一様なもの・中性(Neutrality)でなくてはならぬ。一様なものがあるからそれを媒介として多様なものは一の多様から他のそれへ変化する事が出来る。さてこの一様なものはLである。Lは Quality=Neutrality つまり Universalistic=Ascription として独立パターン(註、筆者の云う権威主義)であり、同時に他局面の源泉なのである(P. 185 参照)。「Lの二側面の論理的説明を筆者は一昨年(1970)の日本社会学会で微分数学で発表し又それは昨年(1971)の本紀要に載せてあるから参照されたい」。さてこの言葉によって一つの社会統制過程と多くの逸脱型の存在及び社会統制過程の一から他のそれへの変動の根拠が定まったであろう。次に逸脱を欲しながらそれを表現しない問題に就いて考察しよう。

4

パーソンズ理論は自己(Self)と他者(Alter)の相互作用の理論である。両者は互に心中に社会を持ちそれを行動として示す。その際に両者の一致と不一致がある。不一致の場合一は他から逃げるか、他を攻撃するか逸脱を示すであろう。ところで我々は好むと好まぬとにかかわらず当面する社会の中で生きているから種々の利害関係を他者に対し持っている。されば互に又は一方に相手を感情的に好きでなくても、例えば経済的な理由より結びつく事もあり得る。換言すれば我々は心の中に第一

義的な社会と第二義的な社会とを持っている。前者は表現され後者は相手に隠されている。前者を私又は君、後者を私自身又は君自身として次の質問を作る事にしよう。

- α 私は君を肯定(+)する, 否定(-)する
- β 君は私を肯定(+)する, 否定(-)する
- γ 私自身は君を肯定(+)する, 否定(-)する
- δ 君自身は私を肯定(+)する, 否定(-)する

この回答は次のどれかである。

- | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| α | β | γ | δ | α | β | γ | δ | α | β | γ | δ | α | β | γ | δ |
| ① | + | + | + | ⑤ | - | + | + | ⑨ | + | - | + | ⑬ | - | - | + |
| ② | + | + | - | ⑥ | - | + | + | ⑩ | + | - | - | ⑭ | - | - | + |
| ③ | + | + | - | ⑦ | - | + | + | ⑪ | + | - | + | ⑮ | - | - | + |
| ④ | + | + | - | ⑧ | - | + | - | ⑫ | + | - | - | ⑯ | - | - | - |

回答者に肯定又は否定の理由を記入させる。この図式で種々の男女関係や職場での同僚関係の形態を分析できるであろう。又どの型からどの型へ変動したかも判らる。更に例えば男女関係で現在どの型が多いかの調査にも有効であろう。例えば私(椿姫), 君(私の恋人)に於てそれは①から⑤に変化した, ⑤の型は現代的ではなからう。私(ジュリアン・ソレル)の②の型は現代的であろう。

以上我々は第一章の各節に於て逸脱つまり社会病理現象に就て考察した。1と2はその理論的整序, 3は社会変動との関係, 4は隠れた逸脱の問題であった。次章には逸脱と家族及び職業との関係を考察しよう。

第二章

行動は彼の心の中り社会の表現である。彼の心の社会は(1)現実主義(2)権威主義(3)自由主義(4)理想主義のどれかである。この社会の表現が社会統制過程である場合が順応行動であり, それから逸脱の場合が逸脱行動である。彼をいま少年としよう。すると此処に順応少年と逸脱少年が存在する。

さて少年は心中の社会を両親から得る。故に家庭の両親の心中の社会がどのような型であり, 又彼らが少年にそれをどの様に(順応的に又は逸脱的に)教えたかが問題となる。故に両親に対し及びそれを裏から見の意味で少年に対し夫々第一章の四つの社会型を以てアンケートを作らねばならない。それは順応と逸脱の少年の属する上・中・下の各家庭に於て試みられるべきである。

ところで少年の保護者は職業を持っている。職業には上下の各び横の区別があり, 各職業にふさわしい既述の社会型が存在する。そして各職業に於る順応型と逸脱型が一定の比率で見出されるであろう。我々は少年の保護者がどのような職業人であるかを知る必要がある。次に

職業に於ては失業や低賃金などの慣れた地位の低下や変化が見られる。故に逸脱少年の研究には, 両親の彼に対する態度の面だけでなく両親の職業に於る安定・不安定の面が忘却されてはならないだろう。この観点に関係するものとして次章に逸脱の責任を国家に求め, 逸脱の予防対策に就て考察したい。

第三章

社会は発展し変遷するものであるから社会の認識は同時にその変動の認識でなくてはならない。さて社会は基本的に経済社会である。パーソンズの「経済と社会」によれば, 経済が維持されるためには次の社会統制過程(L-I-G-A)が必要である(P.53)。

- L Cultural-Motivational System
(文化の及び動機づけの体系)
- I Integrative Sub-system
(統合を受けもつ下位体系)
- G Polity (政治)
- A Economy (経済)

具体的には上のLを生産力とか権力そしてIを生産関係とか政府とかで考えればいいであろう。そしてこの図式は封建制社会とか資本制社会とかの各社会が自らを維持する為に必要な図式である。ところで社会が一から他への変化(封建制から資本制への如く)及び一つの社会の内部的変化(資本制社会の発展段階の如き)の生ずるのはどの様に説明できるのであろうか。それは次のように考えられるであろう。一つの社会にはそれにふさわしいLがある。そのLを支持するIがある。その後GとAがあり社会統制がある。しかし新しいLが生れると従来のIはそれを拒否ないし圧迫するであろう。其処に社会斗争と逸脱が生じる。しかし新しいLに対し従来のIが退行し新しいIに位置をゆずると新しいIは上のLを支持する。その後新しいGとAがあり新しい社会統制がある。ここに上述の社会変動が生れる。更に社会変動にはこの他に次の場合があるであろう。デュルケムによれば近代社会・産業社会はそれ自身慢性のアノミー(無統制)に陥入っている(デュルケム, 前掲書P.254)。即ち資本制社会は倒産や失業などを生み出す。

上の種々の社会変動—それはその際に社会斗争や逸脱を同伴する—に於て生活困窮者が続出するであろう。彼らは逸脱行動を拡大するであろう。これの放置は全体社会(国家)自体の存立を脅かすに違いない。ここに国家の貧困に対する対策が必要となる。例えば1930年代の恐慌中に米国で社会保障法が, 又第二次大戦後に英国や日本で社会保障が強化・拡大されたのはこの理由である。

以下に社会保障の図式をパーソンズのタームで若干考察しよう。

〔Ⅰ〕 人は賃金(A)を得る為に労働力(L)と職場(I)と雇用契約(G)を持っている。賃金が失業・老令等で中絶・喪失する時期に社会は失業給付などを与える。給付(A)は労・使・国の所得(L)とその拠出(I)及び法(G)によって得られる。

〔Ⅱ〕 給付の保障は社会政策である。給付内容に高低・大小があり且つ労・使・国三者の拠出率の相違は、諸政策の中で社会政策が占める地位に帰因する。そして諸政策のヒエラルキーは経済(A)が決定する。

〔Ⅲ〕 国々によって失業保険・健康保険・家族手当などの有無がある。それは経済体制(A)の相違による。

〔Ⅳ〕 例えば英国に於て昔の救貧法、戦前と戦後の各国民保険法の如く給付の法の内容が異なるのは、それらがその時代の社会変動に対応するからである。

〔Ⅴ〕 ホブマン (Hobson, D. L) の「福祉国家」(1953)によれば英国の社会保障は福祉国家より生れる。(P. 1)。では福祉国家はどの様な社会構造なのか、又英国が福祉国家になる切迫した事情は何であったのか。此点に就て彼の書は不明確の如くである。確かに英国が「ゆりかごから墓場まで全国民の」社会保障を作ったのに対し我々はその経済的必要の分析を必要とするのであろう。しかしこれは小論に於ては今後の研究としなくてはならぬ。

さて次章には如何に制度の網が完備しても人々はその網から逃げる魚であると云う見解を考察したい。この見解に従えば我々の心の中には逸脱への傾向が予め存在しているのである。

第 四 章

社会は無定形(Formless)ではなく形のあるもの(例えば現実主義的社会)である。我々はその社会を心に持ちそれを実現する為に行動する。悩みは心の社会が実現されぬ時に生れ、その際我々は悩む人として人に相談する。相談は臨床心理学ではカウンセリング、社会福祉で

はケースワークと云われているが意味は同じである。さて面接者は悩む者の社会は何であるかを彼に確認させる事及びその解決の方法に就て彼が自ら知る様に働きかけねばならない。次に一部の悩む者は自己の心中の社会が行動により実現されその結果失われた事或は疑いや期待外れの為その社会に興味を失った事で悩む場合がある。その際面接者は彼に「もう一度」と激励するか又は今迄とは異った社会の型を示す事により彼に新しい目標を与えるであろう。第三に悩む者には一切の社会の型に価値を認めたい者がいるであろう。それを無色の一様な生と云うか或は同様に社会死(Social Death)と云うか定かでないが、人間はそのようなものに近寄りたくなる傾向がある様である。その様な悩む者が仮りに訪れた時面接者はどう応待するのであろうか。彼が社会学者なら多分次のように答えるであろう。

デュルケムによれば「社会がなければ社会学は存在せぬ事」及び「すべて運動は、ある意味に於ては愛他的である。何故ならば運動は遠心的であり存在(Existence)をそれ自身の外に拡げるからである」(デュルケム、前掲書P 38, P 279)。即ち行動という心中の社会を実現する為の肉体の運動は、愛他的なのでありたといそれがパチンコ屋で玉をはじく行動であってもそれは「何もしないで一切無関心」である事よりも彼にとって幸福なのである。そしてマートンの云う如く我々は心の社会の実現即ち「欲求充足の為にのみ行動するのでなく、例えば品物に対する欲求充足と並んで品物獲得によって得る名声」(マートン、前掲書P 58, P.P. 69~70)ないし他者への構えの潜在的欲求の為に行動するに違いないのである。(パーソンズの云う各局面の源泉としてのLが想起される)。つまり他者に対する憎しみ、愛、怖れ、悲しみ等の愛他心・人間社会の興味がなければ行動は生れないのである。

小論の一部は昨年の紀要、及び昨秋の日本社会学会と今春の関西社会学会で発表したものを改訂した。

(1950年7月20日受理)